

## 光源氏、須磨・明石の月

### ——「淡路島の月」を中心に——

余田 充

【論文概要】光源氏の須磨・明石退去の物語（須磨卷後半と明石卷）は、離京前の源氏歌「ゆきめぐりつひにすむべき月かげのしばし曇らむ空なながめそ」に詠まれているように、自身の退去を月の運行や月影の清澄に喩え、失脚は月の曇っている間のことだと言う。

① 須磨、八月十五夜仲秋。源氏の口ずさむ「二千里外故人心」や、源氏詠「見るほどぞしばしなくさむめぐりあはむ月の都は遙かなれども」から、都と須磨の隔絶された距離感を強調する。また白居易の詩「八月十五日夜、禁中独直、對月憶元九」の「猶ほ恐る、清光は同じく見ざるを、江陵は卑湿にして秋陰足し」から、月は澄んでいないものと思量される。

② 明石、翌年四月夕月夜。くもりな「海の上」から「故里の池水」を想い出す。「十五夜」と題する躬恒歌「あはと遙かに」を引くことにより、①の「十五夜」と照応している。源氏は須磨から明石へ浦伝いし、畿内から畿外へ移ったが、淡路島を眼前に見て「あはと見る淡路の島のあはれさへ残るくまなく澄める夜の月」と詠う。須磨よりさらに西下、しかし淡路島の月は清澄だった。

③ 明石、八月十三日月明。「入江の月影」につけても「恋しき人」（紫上）を想い出し、②の紫上に対する恋心を増長させる。③の「八月十三日」は①の「八月十五夜」と照応し、③の「入江の月影」から「恋しき人」を偲ぶのは、②の「夕月夜」の「海の上」から「故里の池水」を想い出すのに照応する。

②・③の、「海の上—故里の池水」・「入江の月影—恋しき人」の関係は、源氏が故里の池水を思い浮かべて紫上の不在を嘆くものだが、はやく中国の梁・虞騫「視月」詩が、「庭—玉潭の水—蛾眉の月」を配して、水に映る月に佳人を重ね、月の消滅に佳人の不在を寓する詩想と通い合う。

【キーワード】光源氏 須磨 明石 月 淡路島 池水

#### 一 はじめに

纏めることができる。

光源氏の須磨・明石退去の物語（須磨卷後半と明石卷）は、次のように

須磨 a 三月二十余日深更、源氏須磨へ下る。

b 須磨の夏、京の人々との交信。

c 須磨の秋・冬。

d 翌年二月二十余日、宰相中将の訪問。

e 三月上巳の祓、雷を伴う暴風雨。

明石 f 風雨止む、源氏の夢に故桐壺院が現れる。

g 翌朝、明石入道、源氏を舟で須磨より明石に迎える。

h 四月、明石入道、娘を源氏に勧める。月夜、源氏琴を弾じ

入道と語る。

i 八月十三日夜、源氏、岡辺の宿を訪い、初めて明石上と契する。

j 翌年七月二十余日、源氏に赦免と召還の宣旨が下る。

k 八月十五日、源氏初めて参内。朱雀帝・東宮・藤壺に再会する。

源氏は須磨へ出発する前、紫の上・花散里・藤壺などを訪い別れの挨拶をした。花散里とは次のような歌を詠み交わしている。

(花散里) 月、か、げのやどれる袖はせばくともとめても見ばやあかぬ

光を

(源氏) ゆ、き、め、ぐ、り、つ、ひにすむべき月、か、げのし、ば、し、曇、ら、む、空、な、な  
が、め、そ (須磨・二二四)<sup>注1</sup>

嘆く花散里に対して、源氏は「めぐりめぐって最後には月の光は澄むはずだ。しばらくの間だから、心配して物思いをなさるな。わが身も時が来れば晴れて帰京できるのだから」と慰める。贈答歌は「月かげ」・「光」を源氏に諭え、源氏歌の「ゆきめぐり」に月の運行する意を懸ける。

「月」は、「釋名曰、月、闕也、滿則缺也、晦、灰也、月死為灰、月光

盡似之也、朔、蘇也、月死復蘇生也、弦、月半之名也、其形一旁曲、一旁直、若張弓弦也、望、月滿之名也、日月遙相望者也(釋名に曰く、月は闕なり。満つれば則ち缺くるなり。晦は灰なり。月死して灰と為る。月光尽くること之に似たり。朔は蘇なり。月死して復た蘇生するなり。弦は月半ばするの名なり。其の形、一傍は曲、一傍は直。弓に弦を張るが若きなり。望は月満つるの名なり。日月遙かに相望む者なり)」「芸文類聚」卷第一・天部上・月」とある。

## 二 須磨の秋

須磨でわび住まいする源氏は、紫上・藤壺・朧月夜など京の人々と消息のやりとりをしてわずかに心を慰めたが、秋風の吹く頃になると寂寥感はいや増してきた。

c 月のいとはなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりとおぼし出でて、殿上の御遊び恋しく、所々ながめたまふらむかしと思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。「二千里外故人心」と誦じたまへる、例の、涙もとどめられず。入道の宮の、「霧や隔つる」とのたまはせしほど、言はむかたなく恋しく、をりをりのこと思ひ出でたまふに、よよと泣かれたまふ。「夜ふけはべりぬ」と聞こゆれど、なほ入りたまはず。

見るほどぞしはしなぐさむめぐりあはむ月の都は遙かなれどもその夜、上のいとなつかしう昔物語などしたまひし御さまの、院に似たてまつりたまへりしも、恋しく思ひ出できこえたまひて、「恩賜の御衣は今ここにあり」と誦じつつ入りたまひぬ。御衣はまことに身放たず、かたはらに置きたまへり。(須磨・二四〇)

源氏は「はなやかにさし出」た月を見て、「今宵は十五夜なりけり」と思い当たり、清涼殿の殿上の間での管絃の御遊を恋しく想い出す。「月の顔」ばかりじっと見つめて「二千里外故人心」と口ずさむ。そして桐壺院没後、一昨年の九月二十日の月夜に藤壺が源氏に「霧や隔つる」と歌を詠みかけたこと、朱雀帝が親しく昔話をされた様子が故院に似ていられたことなど、次々と都へ思いを馳せている。

藤壺が「霧や隔つる」と歌を詠みかけた件は、賢木巻に次のように語られていた。

月のはなやかなるに、昔かうやうなるをりは、御遊びせさせたまひて、今めかしうもてなさせたまひしなどおほしいづるに、同じ御垣のうちながら、かはれること多く悲し。

九重に霧や隔つる雲の上の月をはるかに思ひやるかな  
と、命婦して聞こえ伝へたまふ。(賢木・一六七)

藤壺は、月明の夜、亡き桐壺院が催した管絃の御遊を回想し、「霧や隔つる」(昔の如く雲の上の月を眺めたいが、幾重にも霧が間を隔てているためか、月影を見ることが出来ない)と、右大臣方の圧迫を嘆いた(「月」は冷泉帝をさす)。源氏は須磨にあつて、仲秋八月十五夜に藤壺と同じく故院の存命時の清涼殿殿上の間での詩歌や管絃の御遊を偲び、藤壺を恋しく想い出しながら時世が変わったことを今身に沁みて感じている。

「霧」は、「西京記云、太平之代、霧不塞望、浸淫被泊而已」(西京記に云はく、太平の代、霧、望を塞てず、浸淫して被ひ泊まるのみ)、「初学記」巻二・天部下・霧」とある。

周知のように「二千里外故人心」は、元和五年(八一〇)仲秋の満月の夜、翰林学士として長安にいる白居易(当時三十九歳)が江陵の親友元稹

(三十二歳)に寄せた詩「八月十五日夜、禁中独直、對月憶三元九」(『白氏文集』巻十四・〇七二四)に拠る。元稹は宦官と衝突し、その年の三月に左遷されて江陵(湖北省江陵县)にいた。

銀台金闕夕沈沈	銀台	金闕	夕べに沈沈
独宿相思在翰林	独宿	相い思うて翰林に在り	
三五夜中新月色	三五夜中	新月の色	
二千里外故人心	二千里外	故人の心	
渚宮東面煙波冷	渚宮の東面に煙波は冷ややかに		
浴殿西頭鐘漏深	浴殿の西頭に鐘漏は深し		
猶恐清光不同見	猶ほ恐る	清光は同じく見ざるを	
江陵卑湿足秋陰	江陵は卑湿にして	秋陰 <small>おは注2</small> 足し	

白詩は都の白居易が江陵の元稹を憶う内容だが、物語は須磨にいる源氏が遠く離れた都の昔なじみの女人たちを偲び、「二千里外故人心」と口ずさむ形にアレンジし捻りがきかせてある。江陵・渚宮(春秋時代、楚の国の離宮の名。楚の都であった郢の南にあった)の「煙波(水辺のもや)は冷ややかに」・「卑湿にして秋陰(秋の曇天)足し」は、須磨の「浦波、夜々はげにいと近く聞こえて」(二三七)に水辺で共通し、「独宿相い思う」白居易は、「ひとり目をさまして」・「思ふかたより風や吹くらむ」(二三七)と紫上らを思いやる源氏の姿に重なる。長安の夜の更けるさま「夕べに沈沈」・「鐘漏は深し」は、須磨の「夜ふけはべりぬ」と聞こゆれど(二四〇)に対応するだろう。

白居易は元稹の居る江陵の土地柄を「猶ほ恐る、清光は同じく見ざるを、江陵は卑湿にして秋陰足し」と思い遣っており、源氏が須磨から眺める都の月は、清光が都と同じようにはさやかに見えぬ、つまり澄明ではな

かった」と読める。

月は所を分かつたず、万里を遍く照らす。人は、月を媒介にして遠く離れている友や故郷を懐かしむ。

南朝宋・謝希逸「月賦」に「歌曰、美人邁兮音塵闕。隔千里兮共明月。（歌に曰く、美人邁きて音塵闕けぬ。千里を隔て明月を共にす。）」（『文選』卷十三）とある。

### 三 淡路島の月

須磨に退去して一年後、三月上巳の日、源氏は暴風雨に襲われる。風雨は数日止まず雷鳴を伴った。ようやく雨が止んだ夜、夢枕に現れた故桐壺院から須磨を去るようにと諭され、翌朝やはり夢告によつて舟を仕立てて迎えに來た明石入道に應じて、入道の居宅に移る。

h 四月になりぬ。更衣えがきの御装束、御帳の帷など、よしあるさまにし出づ。よろづにつかうまつりいとなむを、いとほしう、すずろなりとおぼせど、人ざまのあくまで思ひあがりたるさまのあてなるに、おぼしゆるして見たまふ。京よりも、うちしきりたる御とぶらひども、たゆみなく多かり。のどやかなる夕月夜に、海の上くもりなく見えわたれるも、住み馴れたまひし故里の池水に思ひまがへられたまふに、言はむかたなく恋しきこと、何方となく行方なきこちしたまひて、ただ目の前に見やらるるは、淡路島なりけり。「あはと遙かに」などのたまひて、

あはと見る淡路の島のあはれさへ残るくまなく澄める夜の月、  
久しう手触れたまはぬ琴を、袋より取り出でたまひて、はかなくかき鳴らしたまへる御さまを、見たてまつる人もやすからず、あはれに悲

しう思ひあへり。

（明石・二七四）

初夏ののどかな夕月夜、「海の上」が明るく見渡され、「故里の池水」かと思ひ紛うばかりに見えた。眼前の淡路島を見て「あはと遙かに」と口ずさみ、「あはと見る淡路の島のあはれさへ残るくまなく澄める夜の月」と詠う。

「あはと遙かに」は凡河内躬恒の詠、

十五夜月

あはちにてあはとはるかにかみし月のちかき今夜はところからかも  
（躬恒注3）〔正保版本「歌仙家集」〕一〇二。新古今・雑上・一五  
一五、題しらず—躬恒。新古今は結句「心からかも」とする伝本もある）

の第二句に拠る。躬恒歌「あはちにて」について、高松宮本『新古今和歌集註』は次のように注している。

あはと云詞はあはれと云心也、あはれは都の月よとはるかに見し也、都に帰て見れば月もあきららかにちかくみゆるとなり、月は都の空にてみれば一入さやけきと云事唐の哥にも有也注4

躬恒は延喜二十一年（九二二）正月淡路権掾に任ぜられ（『作者部類』、同国にいた。躬恒歌「あはちにて」は、任終えて帰京後、延長三年（九二五）頃の八月十五夜の詠で、明月を仰いで、「淡路では遙か遠くに見た月だが、都で見る満月はやはり澄んで冴え渡っている」と感慨にふけっている趣の歌だろう。

源氏詠「あはと見る淡路の島のあはれさへ残るくまなく澄める夜の月」

について、本居宣長『源氏物語玉の小櫛』は次のように注している。

あはとの意、拾遺にくはしくいへるが如し、猶又やまと物語にも、はま千鳥とびゆくかぎり有ければ雲たつ山をあはとこそ見れ、人まろ集といふ物にも、梢のみあはと見えつ、は、きゞの本をもとより見る人ぞなきなども有り、はやくの抄どもは、此詞をしらずして、みだりに注せられたる物也、さてこの歌の初句は、かの躬恒が、彼はと見たりしをいひて、今源氏君の、みづから見給ふをかねたる也。さる故に見しとはいはずして、見るとはいへり、三の句のさへは、かの躬恒があはと見し時のあはれさへ也、上にあはとはるかにと、誦し給へる、これ其時のあはれを思ひやり給へるもの也、拾遺、此さへの注は誤也<sup>注5</sup>

『玉の小櫛』の説くところを纏めると、

- 1 契沖「源註拾遺」も詳述しているように、「あはと」は「かれはと」の意に「阿波門」（鳴門海峡）の意を添えたものである。「泡」の意はない。古い源氏注釈書は、「あはと」という詞を知らないために妄りに注している。
- 2 初句「あはと見る」は、躬恒が月を「あはとはるかにみし」を言い、かつ今源氏自身も月を見ている意を、兼ねていったものである。
- 3 第三句「あはれさへ」の「さへ」は、昔躬恒が都の月を「あはとはるかにみし」時のあはれさへ、の意である。『源註拾遺』の「さへ」の注は誤りである。

2・3に特に注意して歌意を取ると、「眼前に浮かぶ淡路島を望むと、島影のみならず、昔かの躬恒が「あれは」と望郷の思いで都の月を眺めたその時のあわれさえも、残らず照らし出す今宵の月よ」となる。源氏は自身の懐郷の情に、昔躬恒が淡路島から都の月を仰いで「あれは」と眺めた

郷愁を重ねている。

須磨から明石に移った源氏は、明石から直接都の月を望むのではなく、明石海峡を隔てて南一里に相對する淡路島の月を仰ぎ、かの躬恒が「あはとはるかに」と都の月を仰いだことを思い浮かべている。ここにもまた捻りが利かせてあるようだ。

律令時代、摂津国は畿内、山陽道の東端に位置する播磨国は畿外（大化改新の詔で、畿内の西端を「赤石の櫛淵」と定めている）。淡路は南海道の下国である。

『万葉集』では羈旅歌として、明石や淡路島がよく詠まれる。「柿本朝臣人麻呂羈旅歌八首」（卷三・二四九〜二五六）中に、「明石（大）門」は、

燈火の明石大門に入らむ日や漕ぎ別れなむ家のあたり見ず

（二五四）

天離る鄙の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ（二五五）

と詠まれている。潮流が激しく変わる明石海峡はつねに波の危険に脅かされてきた。難関明石海峡を出ると舟は畿内を離れ、異郷に向かつて去って行き（二五四）、逆に筑紫から上京する際は明石海峡まで来れば大和の山々が見え家郷に近づいたことを実感した（二五五）。海路では淡路すなわち「明石海峡が畿外と畿内とを分ける海坂（海の境界）」だった。源氏は須磨から明石へ「浦伝ひ」した。畿内から畿外つまり外国（四方国）に超えたのである。律令官人にとって外国は異郷の地「天離る鄙（夷）」であった。官職を剥奪され自ら離京せざるを得なかった源氏にとっては、耐えられない西下ではなかったか。

#### 四 淡路の島のあはれ

躬恒は系譜・生没ともに未詳。『作者部類』には彼を「五位。先祖不詳淡路権掾。凡河内諱利男。延喜廿一年正月卅日任淡路権掾」と伝えるが確かでない。寛平六年（八九四）二月甲斐少目、延喜七年（九〇七）正月丹波権目、同十一年（九一一）正月和泉権掾、同二十一年（九二二）正月淡路権掾などを歴任。躬恒の官吏生活はほぼ三十年に及ぶ。その間、任和泉権掾から淡路権掾の任果てまで、十年以上も地方の三等官に止まっており卑官であった。躬恒にはわが身の不遇を託つ沈淪の歌も多い。

イ いつこともはるのひかりはわかなくにまたみよしの、やまはゆきふる

（躬恒Ⅳ・四二七。後撰・春上・一九）

ロ 人につくたよりのたになし大あらしの杜のしたなる草の身なれば

（躬恒Ⅱ・一九七。後撰・雑二・一一八六）

ハ おほあらしの杜のしたなるかけ草はいつしかとのみひかりをそまつ

（躬恒Ⅴ・四三）

ニ いつみにてしつみはてぬとおもひしを今日そあふみにうかふへらなる

（躬恒Ⅳ・一六八）

イは、延喜の御時、御厨子所に仕えている頃、沈淪を嘆き「あるひと」に贈った歌。『後撰』は、天皇に御覧に入れてほしいと期待して、ある蔵人に託した歌（詞書「……御覧せさせよとおぼしくて、ある蔵人におくりて侍りける十二首がうち」とする）とする。

ロは、藤原兼輔のひきによる官位の上昇を期し、友人の貫之を通して、

兼輔の家に名簿を奉る際に、貫之に贈った歌。ハも、同様に「おほあらしの杜のしたなるかけ草」を詠んでおり、権門につてのない不遇を嘆いている。

ニは、延喜十六年（九一六）九月廿二日の宇多院石山御幸の際、近江介兼輔からの願望でにわかになげつけ、屏風歌を詠んでいる。

卑官の身であったが、このように宇多法皇や兼輔の恩顧を受けて、著名な歌会・歌合にも名をつらね、専門歌人としての評価は高まった。

任淡路権掾は躬恒の三十年間の官吏生活の最後を飾るものであり、老齢の身で務めを果たした上は、何としても無事に都に戻りたいという願いは強かったろう。淡路権掾が極官であったとすれば、五位には至らなかったものか。

あはぢのまつりごと人の任はててのほりまうできて

のころ、兼輔朝臣のあはたの家にて みつね

ひきてうゑし人はむべこそ老いにけれ松のこだかく成りにけるかな

（後撰・雑一・一一〇七。躬恒Ⅰ・一七）

この歌は、延長三年（九二五）春頃か、淡路権掾の任果てて帰京後早々に、恩顧を被っている兼輔の栗田の家に赴き、無事に任を果たした報告とお礼を述べている。「ひきてうゑし人」は躬恒、「松」は兼輔を喩えたものか。躬恒はわが身を「老いにけれ」と嘆いている。

その後、間もなくして詠んだと思われるのが、明石で源氏が口ずさんだ「あはちにて」の詠である。歌人としてははなはなしかつたが、出自が低くて卑官であった躬恒の最晩年の詠歌を、源氏は「あはと遙かに」と想起したことになる。

## 五 八月十三夜

続いてiに進もう。娘の将来について明石入道から打ち明けられた源氏は、思い合わせられるところが、娘への関心を示す。秋になり、独り寝を託す源氏が明石上との対面を望んだが、彼女は応じない。女は数ならぬ身の程を思い、親は二人の仲を憂慮する。八月十三日月明の夜、入道は源氏に「あたら夜の」と呼びかける。「あたら夜の」は「あたら夜の月と花とおなじくはあはれしれらん人に見せばや」(『後撰』春下・一〇三、月のおもしろかりける夜、はなを見て―源さねあきら)の初句に拠る。

i 忍びてよろしき日見て、母君のとかく思ひわづらふを聞き入れず、  
弟子どもなどにだに知らせず、心一つに立ちあ、かかやくばかりしつ  
らひて、十三日の月のはなやかにさし出でたるに、ただ「あたら夜の」  
と聞こえたり。君は、好きのさまやおぼせど、御直衣たてまつりひ  
きつくるひて、夜ふかして出でたまふ。御車は二なく作りたれど、所  
狭しとて、御馬にて出でたまふ。惟光などばかりをさぶらはせたまふ。  
やや遠く入る所なりけり。道のほども、四方の浦々見わたしたまひて、  
思ふどち見まほしき入江の月影にも、まづ恋しき人の御ことを思ひ出  
できこえたまふに、やがて馬引き過ぎておもむきぬべくおぼす。  
秋の夜のつきげの駒よわが恋ふる雲居を翔れ時の間も見む  
と、うちひとりごたれたまふ。(明石・二八八)

入道の招きに応じ、源氏は馬を駆って明石上にいる岡辺の宿に向かう。「四方の浦々」を見渡し、「入江の月影」につけても、真っ先に「恋しき人」のことを想い出し、「秋の夜のつきげの駒よわが恋ふる雲居を翔れ時の間も見む」と口ずさむ。

以上、須磨のc、明石のh・iの三つの場面を見てきたが、まとめてみると次のようになる。

cは、須磨退去後、初めて迎えた仲秋八月「十五夜」。源氏は明月を眺めて、禁中の月の宴・殿上の管絃の宴、都の親しい女人のことを想い出し懐旧にふける。「月の都」は遙かに遠い(京へ帰れるときも遙か先)が、月を眺めている間はしばらく心が慰められた。

hは、翌年四月の「夕月夜」。曇りない明石の「海の上」が「故里の池水」に見え、昨年三月二十余日、須磨へ旅立つ日の、紫上との悲しい別れを想い出す(後述)。都は遙か遠いが、澄む月の下に明石から淡路島は「目の前」にさやかに見渡せた。「十五夜」と題する躬恒歌「あはと遙かに」を源氏が口ずさむことにより、cの「十五夜」と照応する。

iは、hと同年の八月「十三日の月」の夜。入道の招きに応じ浜の館から岡辺の宿に向かう途中、「入江の月影」に「恋しき人」を想い、心は都へと憧れる。源氏詠「秋の夜のつきげの駒よわが恋ふる雲居を翔れ時の間も見む」について、『細流抄』は「物語の餘情ふかき物也」と認めつつ「都へあくかれて出でたきのよし也。此段物語のかざりにかけり」とする。しかし、ここでは岡辺の宿に向かいかけた源氏の心が急に都に向き直るところが眼目なのだろう。hの「言はむかたなく恋しきこと、何方となく行方なきこちしたまひて」は、躬恒歌「わがこひはゆくへもしらずはてもなし逢ふを限と思ふばかりぞ」(古今・恋二・六一一、題しらず)を踏むが、iはこの引歌の源氏の恋心を増長させている。八月「十三日」はcの八月「十五夜」と照応し、「入江の月影」に「恋しき人」を想い出すのは、hの「海の上」を見渡しして「故里の池水」を想い出すのに照応する。

c・h・iいずれも「月」や月下の「水(海・浦・入江)」が源氏に故郷の「池水」や「恋しき人」(所々)を想い出させている。

「月」は、「淮南子曰、月、天之使也、積陰之寒氣、大者為水、水氣之精者為月（淮南子に曰く、月は天の使なり、積陰の寒氣、大なる者は水と為り、水氣の精なる者は月と為る）」と。また「舊曆説曰、日猶火也、月猶水也、火則施光、水則含影……」（舊曆説に曰く、日は猶ほ火のごときなり、月は猶ほ水のごときなり、火は則ち光を施し、水は則ち影を含む……）（『芸文類聚』・第一・天部上・月）とある。

## 六 故里の池水

さて、先のhの件で、源氏は明石の海を見て故郷の二条院の池水を思い浮かべ、都恋しさをつのらせた。

庭の池は伝統的に海を表すものであり、『作庭記』にも「石をたつるにハやうやうあるべし」として「大海のやう 大河のやう 山河のやう 沼池のやう 葦手のやう等なり」<sup>注11</sup>と、「大海のやう」を第一に挙げている。

源氏は二条院の池水にどのような思い出を残していたのだろうか。源氏の私邸二条院は、もと母桐壺更衣の里邸で、源氏はそこで生まれた。元服して葵上と結婚後、父桐壺帝の命により改築された。

里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨くだりて、二なう改め造らせたまふ。もとの木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めでたく造りののしる。かかる所に、思ふやうならむ人をすゑて住まばやとのみ、嘆かしうおぼしわたる。

（桐壺・四〇）

もともと立木や築山の配置など風情あるところであったが、その立地条件を巧妙に活かして、特に池を広く造り直して景趣に富んだものとした。源氏は、こんなところに愛する人を住ませたいと念じている。

源氏十八歳冬、源氏の許に迎え取られたばかりの幼い紫上が目にした二条院の庭は、次のように記される。

東の対にわたりたまへるに、立ち出でて、庭の木立、池の方などのぞきたまへば、霜枯れの前栽、絵に描けるやうにおもしろくて、見も知らぬ四位五位こきまぜに、隙なう出で入りつつ、げにかしき所かなとおぼす。

（若紫・二三七）

明石巻の先のhの場面以前では、二条院の池（水）について記述があるのは、以上の二例のみである。そこには池にまつわる源氏と紫上ふたりの、具体的な暮らしぶりは書かれていない。源氏が「故里の池水」を想い出したのは、須磨に出立する日の紫上との別離が無性に辛くてやりきれなかったからではなからうか。

その日は女君に、御物語のどかに聞こえ暮らしたまひて、例の、夜深く出でたまふ。（中略）「月出でにけりな。なほすこし出でて見だに送りたまへかし。いかに聞こゆべきこと多くつもりにけりとおぼえむとすらむ。一日二日たまさかに隔つるをりだに、あやしういぶせきこちするものを」とて、御簾まき上げて、端にいざなひきこえたまへば、女君、泣き沈みたまへる、ためらひて、ゐざり出でたまへる、月かげに、いみじうをかしげにてあたまへり。

（須磨・二二三）

明石入道の居宅に落ち着いた後、京の紫上へ返事を認める折にも源氏は「鏡を見ても」とのたまひしおも、かげの離るる世なきを……」（二七二）と、別れの際紫上が歌を詠んだ面影が忘れられなくて夢からさめやらぬ心地でいることが、記されていた。

梁の虞騫「視月」詩〔芸文類聚〕・第一・天部上・月〕は次のように、佳人を思う心を詠う。

清夜未云疲 清夜未だ疲むと云はず

珠簾聊可發 珠簾聊か発くべし

冷泠玉潭水 冷泠たる玉潭の水

映見蛾眉月 映し見る蛾眉の月

靡靡露方垂 靡靡として露方に垂れ

暉暉光稍没 暉暉として光稍く没す

佳人復千里 佳人復た千里

餘影徒揮忽 餘影徒だ揮忽するのみ

清夜を迎えたが、まだ疲れはせぬ。簾を少し掲げて庭でも眺めよう（首聯）、その庭には玉のような潭の水が流れ、水には蛾眉のような三日月を映し出している（頷聯）、次々に露の玉がこぼれ、きらめく月の光もやがて消えてゆく（頸聯）、こんな宵にあの佳人は千里の彼方に隔たっている。蛾眉の餘影がわが眼に映ったのもほんのちよつとの間、忽ち消えてしまう（尾聯）。

「庭―玉潭の水―蛾眉の月」の構成、きらめく「月」の消滅、ほんの束の間の月の「餘影」（佳人の面影）―と、佳人を追憶する詩趣は、h・iの源氏の思いに重なる。

さて、先のiで、源氏は岡辺の宿に通い始めて、明石上と契る。一方、都では朱雀帝が眼病を患い、右大臣が薨去するなど凶事が続いた。年が改まり、病悩の帝は弘徽殿大后の反対を押し切って、秋七月廿余日、源氏召還の宣旨を下す。源氏は明石上（懷妊）との別れを惜しみ、二年数ヶ月ぶりに帰京する。八月半ば、源氏は権大納言に昇進し、帝と対面する。

光源氏、須磨・明石の月 ―― 「淡路島の月」を中心に ――

k 召しありて、内裏に参りたまふ。（中略）上もはづかしうさへおほしめされて、御よそひなど、ことに引きつくりろひて出でおはします。御こち例ならで、日ごろ経させたまひければ、いたうおとろへさせたまへるを、昨日今日ぞ、すこしよろしうおぼされける。御物語しめやかにありて、夜に入りぬ。十五夜の月、おもしろう静かなるに、昔のこと、かきくづしおぼし出でられて、しほたれさせたまふ。もの心細くおぼさるなるべし。（明石・三〇六）

八月「十五夜」、源氏が帰京後初めて参内するkの場面は、二年前の須磨の八月「十五夜」のcの場面と照応する。cでは須磨で源氏が殿上の御遊や朱雀帝のことを「恩賜の御衣は今ここにあり」と思んでいたが、kでは帝が「昔のこと、かきくづしおぼし出でられて」涙にくれている。いずれも「十五夜の月」が往時を想い出させるものとして機能している。

「月」は、「禮斗威儀曰、政太平則月圓而多輝、政升平則月清而明（禮斗威儀に曰く、政太平なれば、則ち月圓くして輝き多く、政升平なれば、則ち月清くして明らかなり）」（芸文類聚）・第一・天部上・月〕とある。

三年後の秋、明石尼君は明石上と姫君（三歳）を伴い、大井山莊（尼君の祖父中務宮の別邸を修築）に入る。源氏は造営中の「嵯峨野の御堂」（大覚寺の南）と同じ頃桂に設けた「桂の院」の用事にかこつけて、大井に明石上を訪れ姫君とも初めて父娘の対面をする。翌日、源氏は迎えに来た殿上人を桂の院で饗応し、都から使いをよこした冷泉帝とも歌を交わす。明石で月明のもと淡路島を望んで歌を詠んだことを想い出し、躬恒が帰京後「所からか」と訝ったことなど話題にし、源氏が「めぐり来て」の歌を詠むと頭中將・左大弁らが唱和する。

〔源氏〕 めぐり来て手に取るばかりさやけきや淡路の島のあはと見し月、

（頭中将）浮雲にしばしまがひし月影のすみはつるよそのどけかるべき  
（左大弁）雲の上のすみかを捨てて夜半の月いづれの谷にかけ隠しむ  
（松風・一四一）

源氏詠は躬恒歌「あはちにてあはとはるかにみし月のちかき今夜はところからかも」を再び思い起こし、都で眺める月はやはり格別だと、躬恒の感慨を反芻している。

源氏は「めぐり来て」（月も巡り、自らも都に帰って来て）初めて桂の院で躬恒の歌「所からか」の真意を実感している。退去中の源氏は明石から淡路島の月を眺めて躬恒の故事（淡路島から「あはと」都の月を見た）を思い遣るといふ迂遠な方法（物語の方法）でしか、都の月を仰ぐことが出来なかつたのであろう。

### 注

- 注1 『源氏物語』の本文は、新潮日本古典集成『源氏物語』二・三に拠る。  
注2 高木正一注『中國詩人選集13 白居易 下』（岩波書店、昭33・7）。  
注3 躬恒集は、『私家集大成 中古I』所収の五本のうち、IV（西本願寺蔵）「三十六人集」四六三を除く四本（I「書陵部蔵 五一・二八」二二五、II「内閣文庫蔵」一三〇、III「書陵部蔵 五〇一・二三五」一一四、V「正保版本」歌仙家集）は題「十五夜（の）月」。Vは第二句「あはと雲井に」の「雲井」に傍書「はるか」。IIは結句「心かよひも」に傍書「ところからかも」。  
注4 『新古今和歌集註 高松宮本』（古典文庫、昭62・2）。  
注5 『本居宣長全集 第四卷』（筑摩書房、昭44・10）。  
注6 契沖『源註拾遺』は、「貫之家集に、あはと見る道たにあるを春霞かすめるかたのはるかなるかな。六帖にはかはと見る道たにと有」と二首を挙げ、「あはと」は「かれは」の意だと説く（『契沖全集 第九卷』岩波書店、昭

49・4）。

注7 契沖『源註拾遺』は、「あはれさへとは月のくまなきのみならず、こよひのあはれさへ残るくまなしといふ心なり」と注する。

注8 櫛淵は詳らかでないが、吉田東伍『増補 大日本地名辞書』（富山房、平4・9）は「垂見村塩屋の境川の古名か」とする。

注9 西宮一民『萬葉集全注 卷第三（有斐閣、昭59・3）、大津透「万葉人の歴史空間」（国語と国文学、昭61・4）。

注10 伊井春樹編『源氏物語古注集成7 内閣文庫本細流抄』（桜楓社、昭55・11）。

注11 『作庭記』は『日本思想大系23 古代中世芸術論』（岩波書店、昭48・10）に拠る。

注12 『玉台新詠』巻五では、何子朗「和繆郎視月」の詩に作る。  
（余田 充・四国大学文学部日本文学研究室）